

《東武博物館主催》
向島文化サロンご案内

松本清張 と 水上勉

社会派推理小説を代表する清張と勉ですが、両者が、純文学（私小説）への対し方において対照的であったことはあまり知られていません。一口で言えば、純文学に猛攻撃を仕掛けた清張に対して、もともと自らの中にある純文学性、次第に目覚めていったのが勉だったのです。今回はこの二人の社会派推理作家の対照性に焦点を絞ってお話します。

— 講師 —



藤井淑禎

【ふじい ひでただ】立教大学名誉教授
専門は、近代日本文学文化、戦後大衆文化、ミステリーなど。主著は、『小説の考古学へ』『清張 闘作家』『清張ミステリーと昭和三十年代』『高度成長期に愛された本たち』『名作がくれた勇氣』『純愛の精神誌』『望郷歌謡曲考』『御三家歌謡映画の黄金時代』『漱石紀行文集』『90年代テレビドラマ講義』『乱歩とモダン東京』『水上勉—文学・思想・人生』『東京文学散歩を歩く』など。

2024年
第1回
12月15日(日)
午後2時～3時30分

清張◆純文学嫌い

清張の純文学嫌いを代表するものと言えば、川端康成の『伊豆の踊子』を〈ひっくりかえし〉た『天城越え』でしょう。〈ひっくりかえす〉というのは、何から何までその逆を行くということです。一高生に対しては鍛冶屋の倅、都会から下田へに対しては下田から都会へ、といった具合です。当時、川端は文壇を代表する作家でしたが、評論家で当時脚光を浴びていたのが若き江藤淳でした。清張はこの江藤に対しても容赦なく矢を浴びせかけます。『砂の器』がその作品ですが、詳しくは会場でお話します。

2025年
第2回
1月19日(日)
午後2時～3時30分

水上勉◆純文学体質

勉のデビュー作が私小説の『フライパンの歌』であったという事実は決定的な重みをもっています。純文学（私小説）とは対照的な社会派推理小説で再デビューしてブームを巻き起こしていた頃も、作中には勉の分身が必ず現れ、寺に修行に出たというあの有名な自伝性があちこちに散見されます。そうであれば、勉がやがて社会派推理小説と訣別して、私小説作家に転じて（回帰して）いくのもうなずけます。今回はそうした勉の歩みを辿りなおしてみたいと思います。

【場 所】東武博物館ホール

東武スカイツリーライン 東向島駅下車

※詳しくは裏面をご覧ください。

【定 員】110名（応募多数の場合は抽選）

【参加費】無料

【応募条件】第1回・第2回の講演は2回1セットの応募
（個別の応募はできません）

【主 催】東武博物館

参加費無料

【応募方法】ハガキとインターネットによる2通りの応募が可能です。

ハガキの場合

裏面に「講演会タイトル」を明記の上、お客様の氏名（フリガナ）、年齢、郵便番号、住所、電話番号をご記入いただき、ご郵送ください。

インターネットの場合

東武友の会のホームページ（www.tobu-tomonokai.co.jp）にアクセスの上、「向島文化サロン」のバナーをクリック。

上記同様の必要事項をご入力の上、送信してください。

【宛 先】〒171-8512 東京都豊島区西池袋1-1-25 東武友の会「向島文化サロン」T係

●当選者には約1週間を目途に、当選ハガキ（入場券）を発送させていただきます。

※一度に複数名のご応募はできません。（複数名が記入されたハガキは無効となります。）1回の応募で1名様のみ有効となります。

応募締切

2024年11月20日(水)必着

【お問合せ】 東武友の会 TEL.03-5951-5248 www.tobu-tomonokai.co.jp

※講演のテーマ内容は変更になる場合もございますので、ご了承ください。 ※ご応募いただきました方の個人情報は、当選ハガキ発送以外の目的で使用することはありません。